

公開シンポジウム

教養とジェンダー

パネリスト

平石 典子 (筑波大学大学院)

「外国語(文学)」を読む女たち
—可憐な生徒から宿命の女へ—

高田 里恵子 (桃山学院大学)

学校の勉強なんかしない
—男の特権?—

小平 麻衣子 (慶應義塾大学)

〈〇〇鑑賞〉は趣味なのか?
—教養の拡張と文学の関係—

コメンテーター

水溜 真由美

(北海道大学)

司会・進行

蔵田 伸雄

(北海道大学)

日時

12月9日(土)

13:30~16:30(13:00 開場)

会場

北海道大学

人文・社会科学総合教育研究棟 2階 W203室

参加費

無料(事前申込不要)

主催

北海道大学

大学院文学研究科 応用倫理研究教育センター

お問い合わせ

Email: caep@let.hokudai.ac.jp

Tel: 011-706-4088(平日 11:00-17:00)



北海道大学
HOKKAIDO UNIVERSITY



●公開シンポジウム●

教養とジェンダー

〈パネリスト〉

- 平石 典子 (筑波大学大学院 人文社会科学研究科 准教授)

「外国語(文学)」を読む女たち—可憐な生徒から宿命の女へ

(著書『煩悶青年と女学生の文学誌—「西洋」を読み替えて』)

日本近代文学がその初期から繰り返し描いてきたのは、男性が女性に外国語(や外国文学)を教える姿であり、それが恋に発展する情景であった。明治文学に描かれた「外国語を使う女性像」の分析から、当時の社会における外国語の位置づけと、女性がそれを読むことが意味するものを考えてみたい。

- 高田 里恵子 (桃山学院大学 経営学部 教授)

学校の勉強なんかしない—男の特権？

(著書『女子・結婚・男選び—あるいは〈選ばれ男子〉』『グロテスクな教養』他)

日本の教養(主義)の特徴は、学校の勉強なぞ軽くこなし、そのうえで「自発」的に文学や哲学や芸術を求めること、つまり学校の勉強という殻をやぶることにある。一方殻をやぶることは女性的教養とは結びついておらず、「女の子」の限界が殻をやぶれないことのなかに見いだされてしまう。こうした「自発性」礼賛はいつごろ誕生したのかを考察していきたい。

- 小平 麻衣子 (慶應義塾大学 文学部 教授)

〈〇〇鑑賞〉は趣味なのか？—教養の拡張と文学の関係

(著書『夢みる教養—文系女性のための知的生き方史』他)

近代文学研究は何をやるのかよくわからない、と言う人がいる。その理由の半分は、文学の研究方法が、大学のありかたに伴う教養観の変化と大きな関係を持っているところにある。研究と教養と趣味の歴史的関係を、ジェンダーの視点を入れて考える。

〈コメンテーター〉

- 水溜 真由美 (北海道大学大学院 文学研究科 准教授)

(著書『「サークル村」と森崎和江—交流と連帯のヴィジョン』)

〈会場〉

北海道大学 (札幌市北区北10条西7丁目)
人文・社会科学総合教育研究棟 2階 W203室



北海道大学
HOKKAIDO UNIVERSITY



北海道大学大学院文学研究科 応用倫理研究教育センター
URL: <http://caep-hu.sakura.ne.jp> Twitter: @caep_hu
Email: caep@let.hokudai.ac.jp
Tel: 011-706-4088 (平日11:00-17:00)